

# 2014年度自己点検・評価報告書(シート)

## 【目標の進捗状況(達成度)評価・報告】(最終年度)

### ＜大学＞

担当(記述)部局は、 ☆印の箇所を記入してください。

### I. 評価項目・要素と担当部局

本報告書(シート)の自己点検・評価項目・要素と担当部局は次のとおりである。

対象部局	統括部局：国際連携機構(国際教育・協力センター)	担当部局：国際連携機構(国際教育・協力センター)
大項目	7 国際交流 《全学的な視点》	
中項目		
小項目	7.0.1 国際交流(国内外における教育研究交流)についての方針を明示しているか。	
要素	(KG1) 国際化への対応と国際交流の推進に関する基本方針の適切性	
小項目	7.0.2 国際交流(国内外における教育研究交流)を適切に行っているか。	
要素	(KG1) 国際レベルでの教育研究交流を緊密化させるための措置の適切性 (KG2) 国内外の大学院間の組織的な教育研究交流の状況(院)	
小項目	7.0.3 国際教育・協力を適切に行っているか。	
要素	(KG1) 国際理解のための教育 (KG2) 国際協力の実践	

### II. 目標の進捗状況(達成度)評価と報告【2014.4.30現在】

#### 《進捗状況(達成度)評価》

本項目において、2009年度～2013年度の中期的な「目標」と「指標」を次のとおり設定し、毎年度進捗状況(達成度)の自己評価を行っている。進捗状況(達成度)評価は、目標の2014年4月30日現在における進捗状況(達成度)の評価(2013年度1年間の活動評価ではなく、2014年4月30日現在で目標がどこまで進んだかの評価)であり、A、B、C、Dの4段階で行ったものである。A、B、C、D評価の基準は目安として次のようなものである。

- A : 目標実現のための計画や方策などを適切に実行し、目標を達成している。もしくはほぼ達成している。
- B : 目標実現のための計画や方策などを概ね適切に実行しているが、まだ目標は達成していない。
- C : 目標実現のための計画や方策などを実行しているが十分ではなく、目標は達成していない。達成にはまだしばらく時間がかかる。
- D : 目標実現のための計画や方策などを実行していない。当然目標は達成していない。

2009年度に設定した「目標」	左記目標の「指標」	進捗状況(達成度)評価				
		2009	2010	2011	2012	2013
1. 海外協定大学を2013年度末に150大学に拡大し、世界の多くの地域・国から交換留学生250人を受け入れ、国際性豊かなキャンパスを実現する。	→海外協定大学数および受入交換留学生。	C	B	B	B	B
2. 海外からの推薦入試など入試制度を改革し、学部、大学院において2013年度末に定員の3%(713人)の外国人留学生を受け入れ、国際性豊かなキャンパスを実現する。そのために、宿舍提供システム整備、ワンストップサービスの提供と奨学金制度を整備する。	→外国人留学生数、宿舍提供数、外国人留学生へのサービス部門の整備および奨学金制度改革の有無。	B	B	B	B	B
3. 英語による授業のみで卒業・修了できるコースを学部、大学院にそれぞれ1コース以上設置し、世界に開かれた大学を実現する。	→英語による授業のみで卒業・修了できるコースを提供する学部、大学院数。	C	B	A	A	A
4. ダブルディグリー制度を2013年度末までに3学部、5大学院に拡充し、世界の大学との教育・研究連携強化を実現する。	→ダブルディグリー制度を有する学部、大学院数。	C	C	B	B	B
5. 海外拠点を2013年度末までに3箇所以上設置し、海外との連携交流ネットワークを構築する。	→海外拠点数。	B	B	B	B	B
6. 国連学生ボランティア派遣日本コンソーシアムを2012年度末までに構築し、国連および国際機関等の法人との連携強化を実現する。	→国連学生ボランティア派遣日本コンソーシアムの構築の有無。	C	C	C	A	A
7. 海外への学生派遣プログラムを拡充し、2013年度末までに900人の学生を派遣する。	→海外への派遣学生数。	C	B	B	A	A
8. 海外客員教員制度を改革し、2012年度から新制度による外国人教員の受入を2009年度比50%増とし、教育のグローバル化と国際間での共同研究を推進する。	→客員教授制度を改革の有無と客員教授受入数。	D	C	B	B	B
9. 教員の国際化を推進し、2013年度には外国人教員比率を全体の12%以上とする。	→外国人教員比率	A	A	A	A	A

☆

2010年度以降に設定した「目標」	左記目標の「指標」	2009	2010	2011	2012	2013
	→					
	→					

## 《進捗状況(達成度)報告》 担当(記述)部局は「指標」に基づいた報告をしてください。

上記で自己評価した目標の進捗状況(達成度)について、次のとおり説明・報告する。

目標1	B	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 2009年度に国際戦略本部を設置して、国際戦略担当の副学長と国際戦略担当の職員を中心に海外協定校数の開発に取り組んだ。2013年度に国際連携機構が設置されてからも引き続き、国際連携機構事務部のネイティブの契約職員等が協定校開発の業務を担当した。開発に際しては、国際教育分野の国際会議への参加や協定候補校の訪問等を必要に応じて行った。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 海外協定校の増加については、2013年度末までに160校を超える協定大学を達成し、当初の目標(150校)を上回った。反対に、受入交換学生については2013年度で、143人と目標数(250名)を下回った。これは、協定締結から協定校が学生募集、派遣を開始するまで数年のタイムラグがあるためである。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 新中期計画(前期)の目標で未達成であった交換学生の受入数については、新中期計画(後期)でも目標数250名を2018年度の目標として設定し、ロードマップを引きなおした。また協定校へのより積極的な働きかけや広報活動も必要となる。</p> <p>その他 2014年度には、175名を超える交換留学生の受け入れが予定されている。</p>	☆ ☆ ☆ ☆
目標2	B	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 2009年度に留学生総合支援課を設置し、外国人留学生用の宿舎提供システムの整備、外国人留学生へのワンストップサービスの提供、奨学金制度改革に取り組んだ。2013年度以降は、国際連携機構事務部の留学生担当がその業務を継承している。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 2014年4月末現在、留学生は590名(学部・大学院)で、目標数を100余り下回った。留学生奨学金制度の改革により、入学前の採用が可能になった。宿舎については、3寮で合計74室を確保し、受入体制を徐々に整備している。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 新中期計画(後期)において、新中期計画(前期)の目標で未達成であった留学生数を現実的目標650名に修正して、ロードマップを引き直した。そのために、①学部海外入試の実施などの入試制度の多様化、②大学院海外推薦入学制度等の大学院留学生入試制度の拡充を行う。</p> <p>その他 留学生の増加に伴い、新たな留学生宿舎の確保が必要(2018年度までに最低80室)。</p>	☆ ☆ ☆ ☆
目標3	A	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 国際戦略本部が英語による学位コースの設置を希望する学部・研究科と調整を行い、新中期計画(前期)で、英語による学位コースを運営する上で必要な教員およびスタッフを確保し、理工学研究科、国際学部が英語によるプログラムを実施している。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 従来から英語による学位コースがある経営戦略研究科、総合政策研究科に加えて、2011年度に国際学部が、2012年度に理工学研究科が新たにコースを設置した。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 新中期計画(後期)では、国際学部及び理工学研究科の英語による学位コースを拡充するとともに、新たに「国際プログラム」(仮称)の設置と各学部が同プログラムのプラットフォームを活用して英語による特定分野の学位コースを設置することを目標とする。</p> <p>その他</p>	☆ ☆ ☆ ☆
目標4	B	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 新中期計画(前期)で、国際戦略本部がダブルディグリー制度(DD)の設置を希望する学部・研究科と協定大学等と調整を行い、共同で順次設置した。同時に、DD奨学金制度なども新たに導入した。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 学部レベル・派遣型ダブルディグリー制度として、カナダのマウント・アリソン大学との間で社会学部(2011年)、国際学部(2012年)、及び商学部(2013年)が制度を設置し、オーストラリアのクイーンズ大学との間で国際学部(2012年)がプログラムを設置。大学院レベル・受入型ダブルディグリー制度: 理工学研究科(2013年)、言語コミュニケーション文化研究科(2012年)が新たに導入。合計で5プログラムを実施。学部レベルでは、目標の3学部を達成、大学院では、2研究科のみ。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 新中期計画(後期)では、欧州やASEANの大学と交換型のDD制度を設置することを目標とする。現在、経済学部がフランスのルール第1大学との間でDD制度の設置を目指す。</p> <p>その他</p>	☆ ☆ ☆ ☆

目標5	B	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 海外拠点の設置と整備は、新中期計画(前期)で、国際戦略本部が協定大学の協力を得て、2009年度に中国拠点(吉林大学)及び北米拠点(カナダ・トロント大学)を設置した。北米拠点については、2011年7月までは、現地同窓に統轄と補佐を委嘱して運営、2011年8月から2012年11月までは、本学専任職員を派遣したが、2013年度は派遣を中断した。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 中国拠点はロードマップ通り進捗し、2012年2月には「日中経済社会発展フォーラム」を開催。北米拠点(カナダ)では、2010年度に本学とトロント/ビクトリア大学主催でシンポジウムを開催。また、2011年度からの飛躍的に増加したカナダへの派遣学生への対応に加え、同年度に採択された文部科学省大学の世界展開力強化事業の推進に役割を果たしている。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 業務の都合で2013年度には、北米拠点(トロント)に専任職員を派遣できなかった。2014年4月からは派遣を再開した。派遣される職員は、本学の「文部科学省大学の世界展開力強化事業」等の推進や、新たな留学プログラムの開発等の業務に加えて、職員のSDの一環とする。また、吉林大学、トロントに続く新たな拠点を蘇州大学とASEANに設置予定。</p> <p>その他 2014年度には、中国拠点(蘇州大学)が発足する。なお、ニューヨーク、欧州等には事務所を設置せずに、現地在住者に調整業務をアドホックで依頼する「関学フェロー制度」を導入予定。</p>	☆ ☆ ☆ ☆
目標6	A	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 国連ユースボランティア派遣日本センターの設置は、新中期計画(前期)で国際連携機構が国連ボランティア計画(UNV)と調整を行い、「国連ユースボランティア」の発足後に、2013年3月にUNVと基本合意書(LOI)を締結し、2013年4月から「国連ユースボランティア」派遣日本訓練センターを設置した。2013年6月には、UNVと正式な協定を締結し、国内5大学と連携協定を締結。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 本学は、「国連ユースボランティア」派遣日本訓練センター(国連ユースボランティア派遣の日本における基幹校、UNVとの交渉窓口)を運営し、本学及び連携校の学生に対して事前研修を実施し、一定の成果をあげている。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 「国連ユースボランティア」派遣日本訓練センターは、新中期計画で運営費の支援を受け、継続して順調に運営できている。</p> <p>その他 2015年度にはUNVとの協定を更新して継続する予定(要交渉)。</p>	☆ ☆ ☆ ☆
目標7	A	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 学生の海外派遣は、新中期計画(前期)で、国際教育・協力課(2013年度以降は、国際連携機構事務局)が中心に推進してきた。海外協定大学の増加や中期留学、外国語研修等の拡充・整備を行った。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 2008年度に400名であった海外派遣学生数は、2013年度末で2.5倍増の1000名を超えた。目標数900名は、2012年度末に達成することができた。なお、文部科学省の「大学の世界展開力強化事業」(2011年度)や「グローバル人材育成推進事業」(2012年度)に採択されたこともプラスの要因となった。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 2014年度以降は、「グローバル人材育成推進事業」に対応して、2016年度に1200名以上、2018年度に1300名以上の派遣を目指す。これを達成するために中期留学や交換留学を拡充すると共に、新たに「短期海外インターンシップ」や「海外学習活動」(仮称)を設置する。</p> <p>その他 「海外学習活動」(仮称)は、大学が募集する交換留学、外国語研修、インターンシップ、社会貢献活動とは別に、ゼミ、グループ単位での計画による海外体験学習を教育プログラムである(2単位を上限に単位認定する)。これは学部・研究科が自主的に推進していく必要がある。</p>	☆ ☆ ☆ ☆
目標8	B	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 海外客員教員制度については、新中期計画(前期)で、国際連携機構(旧国際戦略本部)が中心に改革案を提示して新たな制度を実施した。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 目標から1年遅れの2013年度に改革が行われた。新たな制度では英語による全学科目での授業提供を目的とした協定校枠を設け、新たに教員を招聘している。しかしながら、海外客員教員数については、2009年度比50%増は達成できていない。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 新中期計画(後期)では、海外客員教員制度の見直しを上げていないが、現状でのニーズを調査し、再度制度の見直しが必要である。例えば現行では実施できないノーベル賞受賞者などの著名な学者の招聘を可能にする制度の導入も検討する予定。</p> <p>その他</p>	☆ ☆ ☆ ☆

目標9	A	Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 外国人教員比率に関しては、新中期計画(前期)「教育」施策の「英語力の飛躍的向上の推進」による言語特別契約教員の採用や、「国際化」施策の「英語による学位コースの設置」等にもない外国人教員の採用が大幅に増えた。	☆
		Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 上記の結果として外国人教員比率は2010年度に12%を越え、2013年度以降は14%を越えている。	☆
		Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 新中期計画(後期)で国際プログラム(仮称)の設置を予定している。この施策の実施においても、外国人教員比率が向上する可能性あり。	☆
		その他	☆
		備考	☆

《評価指標データ》

(特定項目データ)本項目は数値的なデータによる評価(現状分析)が可能のため、次のとおり指標を定め経年比較している。

【全学部】			単位	2009	2010	2011	2012	2013	2014	備考	
指標1	国際交流協定締結機関数		機関	77	97	118	128	142	163	・5/1現在 ・2009年度データに産業研究所1、言語教育研究センター3含む。	
指標2	国際交流協定締結国数		国	25	27	32	33	36	37	5/1現在	
指標3	海外からの受け入れ学生数	国数	国	17	25	29	26	25		累計数(学部+センター等)	
		外国人留学生	正規	人	338	377	413	457	479	464	・5/1現在(学校基本調査) ・正規とは学位取得目的
			交換	人	94	125	127	133	132		・累計数(学部+センター等) ・交換は正規以外とする。
		外国人留学生在籍学生比率	正規	%	1.7	1.8	1.9	2.0	2.1	2.0	外国人留学生÷在籍学生数
			交換	%	0.5	0.6	0.6	0.6	0.6		
その他(セミナー等による受け入れ)	人	8	18	12	112	96					
指標4	海外への派遣学生数	国数	国	12	11	18	20	22		累計数(学部+センター等)	
		人数	長期	人	142	164	376	412	425		・累計数(学部+センター等) ・1学期以上を「長期」
			短期	人	284	282	392	470	598		・累計数(学部+センター等) ・1学期未満を「短期」
		在籍学生比率	長期	%	0.7	0.8	1.8	1.8	1.8		海外へ派遣した学生数÷在籍学生数
			短期	%	1.4	1.3	1.9	2.0	2.6		
指標5	海外からの受け入れ教員数			長期	人	5	6	1	1	1	・累計数(学部+センター等) ・1年間以上を「長期」
				短期	人	13	18	18	19	23	・累計数(学部+センター等) ・1年間未満を「短期」
指標6	海外への派遣教員数			長期	人	12	12	11	12	12	・累計数(学部+センター等) ・1年間以上を「長期」
				短期	人	434	673	635	635	603	・累計数(学部+センター等) ・1年間未満を「短期」
指標7	国連ボランティア(UNV)の参加者数		人	4	6	6	6	16		・累計数(学部のみ) ・春・秋の合計	
指標8	外国人教員比率		%	10.2	12.5	13.7	13.9	14.8	14.1	・5/1現在	

※指標3「海外からの学生の受け入れ」の「外国人留学生」(正規)は2009年度までは1年間の累計数。2010年度以降は当該年度5月1日現在の数字。(学校基本調査に合わせた。)

※指標7「国連ボランティア(UNV)の参加者数」は2013年度から国際社会貢献活動参加者を含む。また国連ボランティアは2013年度より国連ユースボランティアとなった。